

NHK音楽番組「みんなのうた」最初期についての考察 ： 童謡・唱歌・民謡を中心に

佐藤, 慶治
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1955363>

出版情報 : 総合文化学論輯. 6, pp.39-54, 2017-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン :

権利関係 :

NHK 音楽番組「みんなのうた」最初期についての考察 —童謡・唱歌・民謡を中心に—

佐藤 慶治

1. 本研究の目的・先行研究・意義と導入

1-1.

本論文の目的は、1961年4月より現在まで放送の続く日本放送協会（以下、NHK）の児童音楽番組「みんなのうた」の放送最初期について、同番組内で放送された戦前の童謡・唱歌、更には民謡の楽曲を中心として、その形成と展開に関する考察を行うことである。研究目的は、「戦後、テレビという新しいメディア・ジャンルの展開に伴い、どのような過程を経て、現代日本の児童音楽文化が形成されてきたのか」という一つの問いに集約することができるだろう。

今回の研究テーマ「みんなのうた」に関する先行研究としては、音楽学者の葉口英子氏による、放送文化史の中での同番組の変遷を分析した「"みんな"の『みんなのうた』：NHK音楽番組の生産・消費をめぐる一考察」や、音楽教育学者の繁下和雄氏による、楽曲歌詞の単語の使用頻度に着目した「現代の歌とことば--『みんなのうた』のことば」、音楽教育学者の津布楽杏里氏による、幼稚園・小学校の音楽教材としての同番組楽曲を調査した「『NHK みんなのうた』の功績：幼稚園、小学校の歌唱教材から見て」などがある。しかし番組の知名度に反して圧倒的に先行研究が少なく、大系的に「みんなのうた」を論じている文献も存在しない。例えば国立情報学研究所の運営する論文検索サイト「CiNii Articles」で「みんなのうた」の論文を検索してみても、12件しかヒットせず、そのうち学術研究と言えるものは、葉口氏による2件と繁下氏による1件、津布楽氏による1件を含めたわずか6件のみである¹。

このように、「みんなのうた」に関する学術研究が少ない理由としては、NHKが著作権に厳しいため、研究資料が入手し辛いことも関係していると考えられる。例えば、「YouTube」や「ニコニコ動画」などの動画投稿サイトに「みんなのうた」の動画がアップロードされても、すぐに削除されてしまう。また、同番組のテキストが2ヶ月毎にNHK出版より発売されているが²、バックナンバーは販売されておらず、国立国会図書館にも1990年度以降のものしか収蔵されていない。執筆者はインターネット・オークション等を利用することによって、過去の同番組テキストの収集を行っている。

「みんなのうた」については、津布楽氏が「これまで放送してきた曲の中には、広く社

会に定着した歌が多数存在する³」と指摘するように、戦後日本の音楽文化形成において重要な役割を果たしたと言えるだろう。例えば《大きな古時計》、《線路はつづくよどこまでも》、《お化けなんてないさ》、《切手のないおくりもの》、《クラリネットをこわしちゃった》等に代表される多くの楽曲が、「みんなのうた」で放送されてから、幼稚園・小学校の音楽教材となった。しかし、ここで重要なこととして、幼稚園・小学校の音楽教材になったり保育現場で使用されるなど、「社会に定着した歌」になった楽曲については、その多くが1960-70年代に放送されたものであるということが挙げられる。また、NHKが運営する「みんなのうた」公式ホームページの「だれもが知ってるみんなのうた」や「歌い継がれる名曲たち」という項目において、代表的な楽曲が15曲程度、記載されているが、そのうち13曲はやはり1960-70年代に放送されたものである。

よって、本論文でその時期の「みんなのうた」の放送楽曲について分析を行うことは、同番組が社会にもたらした影響や、日本音楽文化史における同番組の位置づけを検討することにも繋がると考えている。

1-2.

「みんなのうた」は、1961年4月から現在まで放送の続くNHKの教育番組である。2ヶ月毎に4～10曲程度の放送楽曲を入れ替えていく形で、これまでに1400曲以上の楽曲が実写映像やアニメーション映像と共に放送されてきたが、最初期の1960-70年代においては、同番組のために作曲されたオリジナルソングよりも、外国曲を原曲に持つ「翻訳歌」であったり、既存の童謡・唱歌・民謡などが多く扱われていた。そこから《大きな古時計》や《クラリネットをこわしちゃった》など、学校音楽教育で使用されるヒットソングも誕生している。

同番組テキストの最初の市販版である『NHK みんなのうたテキスト 69-4・5月』においては、番組開始のねらいについて「誰もがいっしょに楽しめ、うたえる健康な美しいうたを」という言葉が記述されている⁴。2011年7月12日に放送された「クローズアップ現代：みんなのうたが見つめた50年」では、番組開始の目的が「歌声喫茶など大衆音楽文化が花開く一方、子供の歌は戦前戦中の童謡や文部省唱歌しかなかったため、子供が心から楽しんで歌える歌を届けたいという動機で『みんなのうた』ははじまった」と解説されていた⁵。また、同番組ホームページでは、「みんなのうた」が「子どもたちへの『共感』を大切にし、世相を取り込みながら、その時代の子どもの心と向き合い続けてきた」と紹介されている⁶。

例えば、ベトナム戦争への反戦歌である《グリーングリーン》や、1960年代の高度経済成長を歌った《ぼくらの町は川っつち》などの楽曲は、典型的な世相の反映であろう。更に「みんなのうた」においては、《夏は来ぬ》のような戦前の唱歌楽曲や、《今日の日はさようなら》のような戦後のヒットソングがカバー形式で放映されることも多く、同番組

は戦前・戦後を通じた日本音楽文化の反映とも見なせる。

20世紀は、スウェーデンの教育学者エレン・ケイの言うように「児童の世紀」であり、同時に、本・ラジオ・テレビとメディアが発展した世紀でもあった。音楽学者の周東美材氏による『童謡の近代 メディアの変容と子ども文化』では、日本のメディア産業の中に、児童という存在が初期から意図的に組み込まれてきたことが論じられている。

本章の最後に、NHKの児童音楽番組史について触れておきたい。日本のラジオ放送は1925年3月より開始されたが、早くも同年7月より、「子供の時間」という番組の放送が開始された。「子供の時間」は1925年から1966年まで放送されたNHKの人気番組であり（期間中に番組名の変更が4度行われているが、NHKのホームページでは、1966年までを同番組の放送期間としている）、放送内容は、「童話」、「講話」、「児童劇」、「音楽」の四種目に分類することが出来る。このうち「音楽」は童謡・唱歌がメインだったが、器楽を中心とした西洋音楽の放送も行われている。

また、戦後の1949年から1964年まで、「うたのおばさん」という幼児向けのラジオ番組が放送されていた。子どものための音楽文化育成を目的としたこの番組では、《サっちゃん》、《めだかの学校》、《ぞうさん》などの有名な童謡が誕生した。「うたのおばさん」は、幼児を対象としたテレビ番組の「うたのえほん」と小中学生を対象にした「みんなのうた」に引き継がれ、「うたのえほん」は1966年より「おかあさんといっしょ」に統合された。

2. 「みんなのうた」の時代区分と後藤田純生氏による述懐

前述の葉口氏は、演奏者と創作者、楽曲の形式などから「みんなのうた」の放送時期を六つに区分している。以下、それぞれについての概要を記載する⁷。

①創始期(1961-1964) キャンプソング・外国民謡・ミュージカルなど既存の外国曲に訳詞をつけ、合唱曲に編曲したものが主流であった。この時期に放送された代表的な楽曲は、《おお牧場はみどり》、《ドレミの歌》、《大きな古時計》など。また、日本人作曲の《小さい秋見つけた》や《手のひらを太陽に》などもこの時期に放送されたものである。演奏の大半を児童合唱団が行っていた。

②展開期(1965-1973) 外国民謡に加え、同時代の欧米におけるポピュラーソングも登場し始める。一方、多くの童謡を手がけてきた国内の著名な作曲家、例えば山本直純、中田喜直、大中恩等によるものが主流となってくる。また、文部省唱歌や戦前の童謡も多く放送された。代表的な楽曲は、《ドナドナ》、《グリーングリーン》、《牧場の朝》、《赤とんぼ》、《猫踏んじゃった》、《地球を七回半まわれ》など。

③発展期(1974-1983) 邦人によるオリジナル曲の創作が定着した。専門の音楽家の作品のみならず、無名のシンガーソングライターであったみなみらんぼうや工藤順子等も起用される。福田和禾子等の、流行歌のヒットメーカーが手がける作品も更に増えた。代表的な楽曲は、《山口さんちのツトム君》、《コンピューターおばあちゃん》、《北風小僧の寒太郎》など。

④多様期(1984-1989) 流行作曲家とアイドル歌手による組み合わせが定番となってくる。曲想は、国内ヒットチャートに並ぶ歌謡曲やポップスと差がなくなってきた。代表的な楽曲は、《メトロポリタン美術館》など。

⑤ポスト多様期(1990-1996) これまでの一定のパターンが定着してきたが、児童合唱団による演奏は激減する。ポピュラー音楽が更に増加し、レゲエやメレンゲなどワールドミュージックの要素も取り入れられる。代表的な楽曲は、《チュンチュンワールドおげんきたいそう》、《一円玉の旅がらす》など。

⑥第二創始期(1997-2000) 「子供のうた」から「大人の歌」への転換が明示された。児童合唱団や子ども歌手が姿を消し、中高年層の男性や父親の視点からの歌などが新たに登場した。代表的な楽曲は、《名もない花のように》、《WA になって踊ろう》など。

本論文においては上記の時代区分を参考にし、既存の童謡・唱歌・民謡が「みんなのうた」で多く放送されていた①創始期と②展開期、すなわち 1961～73 年を主要な研究対象時期として考察を行う。この時期に番組制作の責任者だったのが、「みんなのうた」の初代番組プロデューサーを務めた後藤田純生氏（1928-2004）である。後藤田氏は、1961-68 年と 1971-74 年の時期に番組制作を担当した。また、後藤田氏は《線路はつづくよどこまでも》などの「みんなのうた」楽曲の作詞者でもある。NHK 退職後は国立音楽大学音楽学部で教員として勤務し、児童・保育音楽に関する研究を行い、複数の研究著作を残している。国立国会図書館における資料調査で、後藤田氏の「みんなのうた」に関する述懐を複数、発見することができたため、同番組成立に関する重要な部分を引用して以下にいくつか記述したい。

(1) 「この番組（みんなのうた）の試作を命じられたのは昭和 35 年の秋」で、課題は「俗悪な歌謡曲に対抗できる好ましい健康な歌」を選ぶことだった。最初に「対象となる“子ども”とはどんな子を指すのか、また、“優れた子どもの歌”とはどんなものなのか」ということに悩み、「一般に愛唱されている『おとなの歌』の中から、子どもが理解し、好むものを選び出すという新しい考え方を、『みんなのうた』の選定基準とした」のである。「当初の『みんなのうた』では、創作曲よりも、既成曲からの選定に力が入れていた」。⁸

(2)「みんなのうた」放送開始当時の「テレビ受信機の普及は驚異的」で「子どもたちの生活にも大きな影響をもたらしはじめた」。すなわち「子供たちが直接大人の世界に接触するようになったため、子供たちが大人のポピュラーソング、CMソングを覚えて歌うという現象が生まれ、これが社会問題として論議されるまでに発展したのである」。番組においては「“こどもの歌”のすぐれたものを取り上げることはもちろんであるが、このほかに、“大人の歌”の広汎な部分までを選曲の対象」に含めた。「それは日本の内外を問わず〔中略〕あらゆるカテゴリーのものから、好ましいものをピックアップしていった」。更には「その伝達者、つまり歌手の起用の中に、子どもたち自身をも加えてみた」のである。⁹

(3)「こどもの歌の空白状況を埋めるためには」どうすべきかと考え、「あのうたごえ（歌声運動）のスピリットを少年少女たちに結びつけたら」どうかという結論に至った。「『うたごえ』の若々しい歌の声、そして周囲の人を参加させずにはおかない親近感、そして芸術的気取りのない無邪気さ」。そして、まず「うたごえ」のヒット曲を中心に置いて、①「うたごえのヒット曲《おお牧場はみどり》《ホルディリディア》《森へ行きましょう》《トロイカ》《雪山賛歌》《かあさんの歌》」、②「好ましい大人の歌《カナダ旅行》《赤鼻のトナカイ》《ブンブンポルカ》《熊ちゃんのピクニック》」、③「新しい創作曲《誰も知らない》《手のひらを太陽に》」、④「愛唱歌から《雪のふる町を》《あわて床屋》《どじょっこふなっこ》」という四つの基準から楽曲が選出された。¹⁰

以上の述懐を基にして「みんなのうた」の形成について纏めると、「みんなのうた」はやはり「好ましい健康な歌」を子どもに届けるために開始されたが、必ずしも「子ども向けの歌」のみならず「大人向けの歌」からも相応しいものがあれば選定し、「うたごえ」の「若々しい歌の声、親近感、芸術的気取りのない無邪気さ」というスピリットに基づき、児童合唱団を演奏の中心に据えた上で、四つの選曲基準を設定したということになる。このうち、本論文において考察の中心となる童謡・唱歌・民謡は、選定基準③「愛唱歌から」と重なっていると言えるだろう¹¹。

3. 「みんなのうた」で放送された童謡・唱歌・民謡

「みんなのうた」で放送された童謡・唱歌・民謡について、以下に全楽曲を記載する。初回放送年月（同番組においては2ヶ月にわたって同じプログラムが放送される）と曲名を記し、曲名横のカッコ内には、楽曲の区分と演奏者を記している¹²。

1961年4月-5月

- ・あわて床屋（童謡、ボニージャックス）
- ・どじょっこ ふなっこ（民謡、中村浩子）

1961年12月-1962年1月

- ・金びらふねふね（民謡、スリーグレイセス、ボニージャックス、みすず児童合唱団）

1962年12月-1963年1月

- ・ずいずいずっころばし（民謡、ザ・ピーナッツ）

1963年8月-9月

- ・木曾節（民謡、ザ・ピーナッツ）

1963年12月-1964年1月

- ・お江戸日本橋（民謡、弘田三枝子）

1965年10月-11月

- ・赤とんぼ（童謡、東京放送児童合唱団）

1966年6月-7月

- ・ほたるこい（民謡、東京放送児童合唱団）

1966年8月-9月

- ・てんさぐの花（民謡、中村浩子、杉並児童合唱団）

1967年2月-3月

- ・花のかざぐるまー花ぬ風車（かじませ）ー（民謡、ひばり児童合唱団）

1967年8月-9月

- ・七つの子（童謡、大阪放送児童合唱団）

1967年10月-11月

- ・浜辺のうた（童謡、静岡放送児童合唱団）

1967年12月-1968年1月

- ・ちんちん千鳥（童謡、東京少年少女合唱隊）

1968年6月-7月

- ・牧場の朝（唱歌、東京少年少女合唱隊）

1968年8月-9月

- ・われは海の子（唱歌、ひばりヶ丘少年少女合唱団）

1968年12月-1969年1月

- ・冬の夜（唱歌、チェチリア少女合唱団）

1969年2月-3月

- ・通りゃんせ（民謡、東京少年少女合唱隊）

1972年10月-11月

- ・月ぬ美しや～月がきれいなのは～（民謡、赤い鳥）
- 1973年4月-5月
- ・ちゃつきり節（民謡、弘田三枝子、ザ・シャデラックス）
- 1973年8月-9月
- ・待ちぼうけ（童謡、ダークダックス）
- 1973年10月-11月
- ・島原地方の子守唄（民謡、由紀さおり）
- 1973年12月-1974年1月
- ・コキリコの歌（民謡、伊藤京子、西六郷少年少女合唱団）
- 1974年4月-5月
- ・ソーラン節（民謡、宍倉正信、ロイヤル・ナイツ）
- 1974年10月-11月
- ・赤い山 青い山 白い山（北海道地方のわらべ唄）（民謡、小柳ルミ子）
- 1974年12月-1975年1月
- ・竹田の子守唄（民謡、ペドロ&カプリシャス）
- 1979年2月-3月
- ・早春賦（唱歌、湘南コーラル・グリーン）
- 1979年6月-7月
- ・夏は来ぬ（唱歌、百合丘コーラス・児童合唱団）
- 1979年10月-11月
- ・紅葉（唱歌、女声合唱団「渚」）
- 1979年12月-1980年1月
- ・花いちもんめ（民謡、川崎少年少女合唱団）

以上、29曲が「みんなのうた」における童謡・唱歌・民謡として挙げられる。今回の分類で用いた童謡・唱歌・民謡の分類基準は、以下の通りである。

唱歌→「初等・中等の学校で教科用にもちいられ、日本語でうたわれる、主として洋楽系の短い歌曲」で、歌詞は「教訓的および美的な内容を持ち」、曲は「欧米の民謡・賛美歌・学校唱歌および平易な芸術的声楽曲からそのまま」とられるか、もしくは「それらの型によって邦人の創作した小歌曲」¹³。明治維新直後の1872年に定められた教育法令である「学制」で、「唱歌」という教科が規定されたことによって始まる。新しく国民国家を創出するため、日本国民の共通文化としての側面が強く打ち出されていた。

童謡→広義には子供向けの歌を指すが、狭義には大正時代以降、子どもに歌われることを目的に作られた創作歌曲のことである。児童文学者の鈴木三重吉が、「自分の子どもがうたったり読んだりする年齢が近づいたとき、まわりを見まわしたところ、うたわせたい歌、読ませたい作品のないことに気づき、『童話と童謡を創作する最初の文学的活動』を展開する¹⁴⁾」ことを目的として、1918年に児童雑誌『赤い鳥』を創刊した。学校唱歌への対抗文化という側面が強い。

民謡→基本的な定義としては、不特定多数の民衆によって自由に伝承されているうちに自然と形になった歌というものである。18世紀ドイツの文学者ヨハン・ゴットフリード・ヘルダーによって Volks lied の概念が創出され、明治時代半ばにその訳語としての「民謡」が定義された。わらべ歌や子守唄もこの一分野である。《ちゃつきり節》などの、明治時代後期から大正時代に、北原白秋らによって新たに創作された民謡は、それまでの民謡と区別して新民謡や創作民謡などと呼ばれる。

ここで大事なことは、戦前に由来するこれらのジャンルの楽曲の放送が、前述の後藤田氏が番組制作を担当していた時期（1961-68、1971-74）とほとんど重なっているということである。「みんなのうた」については「一連の、制作・演出・編集といったものが、ひとりのプロデューサーの意向にも大きく関わってくる¹⁵⁾」ため、その交代によって（基本的なスタンスは守りつつも）路線が大きく変わるということがある。すなわち、既存の童謡・唱歌・民謡を番組で放送するという点については、後藤田氏の意向が大きかったと考えても差し支えないだろう。

上記の楽曲群について、それ以前とは間が空く形で、1979年に《早春賦》、《夏は来ぬ》、《紅葉》、《花いちもんめ》の4曲が放送されているが、この4曲については、いずれも作曲家の三枝成章氏が編曲を行っている。三枝氏は1971年に東京藝術大学大学院作曲専攻を修了、「NHK のど自慢」を発案したNHK音楽番組ディレクターで音楽評論家の三枝嘉雄氏を父にもち、10曲以上の「みんなのうた」楽曲を作るなど、NHKと関わりの深い作曲家であり、1979年の4曲の編曲については、ある種のシリーズ企画であったと推察される。

また、1973-74年に《ちゃつきり節》、《島原地方の子守唄》、《コキリコの歌》、《ソーラン節》、《赤い山 青い山 白い山》、《竹田の子守唄》という、地方で歌い継がれてきた6曲の民謡が放送されている。これは1969年度から73年度まで「みんなのうた」で行われたシリーズ企画「お国めぐりシリーズ」に関連するものと言えるだろう（ただし、「お国めぐりシリーズ」として明記されているのは《ちゃつきり節》、《島原地方の子守唄》、《コキリコの歌》の3曲のみである）。このシリーズでは日本の土地や名産などを折り込んだ楽曲、いわゆる「ご当地ソング」が放送されたが、《長崎めがね橋》、《さっさか大阪》のようなオ

オリジナルソングがほとんどであった。

更に、1966-72年の「みんなのうた」では、《てんさぐの花》、《花ぬ風車：花のかざぐるま》、《月ぬ美しゃ～月がきれいなのは～》という3曲の沖縄民謡が放送されている。これらについては、ベトナム戦争への反戦歌である《グリーングリーン》などと同じく、当時の世相を反映した楽曲とも見なすことができるだろう。すなわち、沖縄返還の気運が高まる中で放送された《てんさぐの花》と《花ぬ風車：花のかざぐるま》、1972年5月の沖縄返還直後に放送された《月ぬ美しゃ～月がきれいなのは～》という位置づけである。

4. NHK「みんなのうた」以前の「みんなのうた」

4-1.

現在、「みんなのうた」という名称は、メタファーとして使用される程に高い認知度を持っており¹⁶、それはNHKの音楽番組「みんなのうた」に由来する部分がほとんどであろうが、同番組の放送開始以前にも「みんなのうた」やそれと似た名称が使用されることがあった。現在、判明しているそのようなもののうち一番古いものは、戦前のNHKのラジオ番組「われらのうた」である。この番組の前身は、《椰子の実》や《めんこい仔馬》などの有名曲を誕生させた「国民歌謡」であった。「国民歌謡」は1936年から1941年の間、新しい曲を1週間に1曲ずつ放送する形で続いていたが、1941年2月に「われらのうた」へと名称変更され、歌手が既成の「国民歌謡」の楽曲や軍歌、小学唱歌を歌う形式の番組となった。更に大東亜戦争の開戦とともに「国民合唱」へと変更され、戦後は「ラジオ歌謡」となり、「みんなのうた」開始翌年の1962年まで放送が続けられた（「みんなのうた」で放送される《雪の降る町を》等の楽曲は、「ラジオ歌謡」で先んじて放送された）。

また、戦前におけるNHK全国学校音楽コンクールの前身でも同じような名称が見られる。1932年に「児童唱歌コンクール」として開始され、現在まで開催の続くこのコンクールは、1941年に「東亜児童唱歌大会中央大会」となり、更に1942年には「全国少国民『ミンナウタへ』大会」となった。すなわち戦前の「ミンナ」は、「少国民」と同義であり、同コンクールや上記の「われらのうた」は、国家総動員体制の中での「国民文化」運動の一種として位置づけられていたのである。

勿論、これらが音楽番組「みんなのうた」の名称の起源とは決めつけられないだろうが、そもそも戦前・戦中の「国民文化」形成と戦後の文化形成は、全く断絶されたものではない。例えば、先に挙げた後藤田氏の述懐でも言及されていた「うたごえ（歌声運動）」は、労音と並ぶ戦後日本の音楽文化運動であり、1948年、生活と音楽とを結び付けることを目的とし、関鑑子氏（1899 - 1973）をリーダーとする中央合唱団によって開始された。53年

には「うたごえは平和の力」のスローガンを掲げて全国合唱団会議を創設し、主として左翼的な運動と結びつく形で全国に広まっていくが（レパートリーも革命歌、労働歌、平和のうた、ロシア民謡などが多い）、音楽学者の渡辺裕氏による『歌う国民』で論じられているように、ここでは戦中の国家総動員体制で使用されていた用語である「国民文化」や「国民音楽」といった用語が積極的に使用されていた。同著では、「新しい『国民文化』の創出というキャッチフレーズは、戦前と一線を画したところからスタートしようとしたはずの、様々な文化運動、とりわけ左翼的な色彩をおびた動きの中にこそ、むしろ頻繁に見られる」が、これについては、唱歌教育を含む戦前の「国民文化」の構造（外枠）のみが残り、その中身だけが戦後の民主主義に基づく新たな国民像に入れ替えられたとされている¹⁷。

後藤田氏も述べているように、「みんなのうた」は「うたごえ」のスピリッツを受け継いだものであり、その流れと無関係ではない。学校教育等で使用される、日本の「社会に定着した歌」が多く放送されているということからも、「みんなのうた」は共通文化的な側面を有しており、戦前の「少国民」へのアンチテーゼとしての「健全な子ども像」を描き出す役割を果たしていたとも見なすことができるだろう。

4-2.

国立国会図書館において戦後の文献を調査した結果、「みんなのうた」という名称がNHKを離れた場所でも使用されていたことが判明した。特に1961年のNHK「みんなのうた」放送開始以前のものについて言及すると、初山滋氏ら3人の童画画家によって編纂された『童謡絵本 みんなのうた』（1949-7、武蔵書房）が最初のものである¹⁸。「童謡」と銘打たれてはいるが、ここでは《池の鯉》、《かたつむり》のような唱歌と、《ひらいたひらいた》、《江戸の子守唄》のような民謡の二ジャンルが主体となって本が構成されている。楽譜はなく、歌詞のみの掲載で、歌詞内容に合わせた童画が歌詞の背景に描かれている。

また、講談社が1947年から59年まで出版していた児童雑誌『こどもクラブ』では、1953年1月号より「みんなのうた」という項目で、童謡・唱歌の紹介がやはり歌詞内容に合わせた童画とともに行われている¹⁹。しかし、子供の歌の紹介自体は1948年1月号より始まっており、1949年5月号から1952年までは「みんなしっているうた」という名称が使われていた。

更に、『みんなのうた』という名称で、講談社（1956）と小学館（1955）よりそれぞれ童謡絵本が出版されている²⁰。前者は主に唱歌を主体に構成されているのに対し、後者には童謡が多く掲載されている。しかし、どちらも童謡と唱歌を併せて記載していることには変わりはない。このような童謡・唱歌の併載については、戦中ではありえないことだった。

そもそも童謡というジャンルは、昭和以降、不振になっていき、童謡を主体とした児童雑誌で最も長く続いた『赤い鳥』と『金の星』ともに1929年に廃刊となっている。また、

軍国色が強まり、「少国民」教育が行われるようになると、統制の必要性もあって、唱歌の対抗文化である童謡は、軟弱として排斥されるまでになっていった。しかし1945年8月に終戦を迎えると、同年10月にGHQは、戦後日本の民主化の方針を指示した。「数ヶ条の指示のうち、文化に関する基本指令は、『軍国主義、超国家主義、神道』の廃止であった。したがって、戦前・戦中の軍国童謡（子どもむけ軍歌）は全部禁止となり、新しい作品が作られるまでは、昔の小学唱歌、文部省唱歌、童謡などが多くもちいられるほかなかった²¹⁾のである。現在の日本では「童謡・唱歌」と二つを併せる呼び方が一般に認知度を得ており、同じようなものとして扱われがちだが²²⁾、それはこのような、戦後の新たな児童音楽文化再編の動きの中で併合されていったとも推察できる。

その他、1956年に出版された新生活研究会編『これだけは知らねばならない. 第5(遊び・なんでもわかる)』(青春出版社) pp. 164-185. では、「いつでもすぐ役立つみんなの歌」という項目で、童謡・唱歌・民謡・西洋曲など多数の楽曲が紹介された。これについては挿絵などはなく、タイトルと歌詞のみの掲載である。これらのような戦後の「みんなのうた」書籍に掲載されている楽曲の中には、前章で触れたNHK「みんなのうた」における童謡・唱歌・民謡の楽曲を先取りしているものがある。以下、その曲目を記載したい。

『童謡絵本 みんなのうた』(武蔵書房)

《通りゃんせ》²³⁾

『こどもクラブ』(講談社)

《ちんちんちどり》²⁴⁾、《あわて床屋》²⁵⁾、《ずいずいずっころぼし》²⁶⁾、《ほたるこい》²⁷⁾

『みんなのうた』(小学館)

《七つの子》²⁸⁾

『これだけは知らねばならない』(青春出版社)

《赤とんぼ》、《どじょっこふなっこ》、《浜辺のうた》、《牧場の朝》、《木曾節》、《七つの子》、《ずいずいずっころぼし》、《通りゃんせ》

前章で全29曲を挙げた「みんなのうた」における童謡・唱歌・民謡の楽曲だが、三枝成章氏編曲による4曲、「お国めぐりシリーズ」に関連する6曲、沖縄民謡の3曲を除くと、残りは16曲である。そのうち11曲が上記の楽曲と重なり、その放送時期は1960年代に限定される(また、残りの5曲のうち《金ぴらふねふね》を除く《お江戸日本橋》、《われは海の子》、《冬の夜》、《待ちぼうけ》の4曲については、後藤田純生氏の「みんなのうた」述懐も掲載されていた日本教育音楽協会の教育雑誌『教育音楽』の、1958年から1960年までに出版された号に楽譜が掲載されている)。

NHK「みんなのうた」以前の「みんなのうた」の存在に触れている研究・言説はこれま

でなかった。NHK が、同番組以前に存在した「みんなのうた」書籍を楽曲の出典とした訳ではないかもしれないが、上記に挙げた 11 曲（と『教育音楽』に記載された 4 曲）の楽曲は、戦後の新たな日本音楽文化再編の中で、そこに相応しいとして取り扱われていたものと見なすことができる。また、児童向けの絵（視覚的要素）と楽曲とを組み合わせるといふ共通要素もあり、少なくとも NHK「みんなのうた」は、そのような民間における動向を併呑する形で番組を開始したと言えるのではないだろうか。

5. まとめ

以上、NHK「みんなのうた」の放送最初期について、同番組内で放送された戦前の童謡・唱歌・民謡の楽曲を中心に、その形成と展開に関する考察を行った。同番組では 1960-70 年代までの時期を中心として、多くの童謡・唱歌・民謡が扱われている。その楽曲群（特に 1960 年代）については、後藤田氏の楽曲選定基準に基づき、同番組の放送開始以前より児童雑誌などを中心に始まっていた児童音楽文化再編に関する一連の動向を引き継いだものと推察される。その後、「みんなのうた」における童謡・唱歌・民謡は、沖縄民謡の放送や「お国めぐりシリーズ」等を経て、三枝氏の編曲シリーズでクライマックスを迎えた。1980 年代以降はオリジナルソングが「みんなのうた」の中心になっていき、既存の童謡・唱歌・民謡が放送されることはなくなってしまった。

本論文の眼目は、これまでの「みんなのうた」研究で触れられていなかった後藤田氏の述懐を掲載したことと、同じくこれまでの研究で触れられていなかった NHK「みんなのうた」以前の「みんなのうた」について、その存在を指摘し、関連性を分析したことという二つにある。また、「みんなのうた」と戦中の「国民文化」とのつながりを指摘するというのも、これまでになかった視点と言えるのではないだろうか。今後の研究の進め方としては、まず戦後民主主義の下で形成されてきた初期の「みんなのうた」が、戦中の「国民文化」とどのような関連性を持っているかということについて、「うたごえ」の楽曲のカヴァーや同時代の西洋曲のカヴァーも研究の対象に含めながら更に深く考察し、その後は、戦後の日本において同番組自体が果たしてきた「国民文化」としての役割についても分析を行っていきたいと考えている。

注

¹ 『Aera』や『サンデー毎日』、『Will』などの週刊誌・月刊誌における記事は、学術研究より除外している。

- 2 「みんなのうた」テキストが市販されるのは1969年4月以降である。1962年4月から1969年3月までは、視聴者がNHKに申し込む形で無料の楽譜集が配布されていた。
- 3 津布楽杏里「『NHK みんなのうた』の功績：幼稚園、小学校の歌唱教材から見て」『研究紀要(4)』（貞静学園短期大学、2013）pp. 89-99.
- 4 日本放送協会編『NHK みんなのうたテキスト 69-4・5月』（NHK サービスセンター、1969）p. 23
- 5 「J-CAST ニュース：テレビウォッチ：私見『クローズアップ現代+』」
<https://www.j-cast.com/tv/2011/07/14101431.html?p=all> 2017.9.1.取得
- 6 「クローズアップ現代+：『みんなのうた』が見つめた50年」
<http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3072/index.html> 2017.9.1.取得
- 7 葉口英子「"みんな"の『みんなのうた』：NHK音楽番組の生産・消費をめぐる一考察」『マス・コミュニケーション研究(62)』（日本マス・コミュニケーション学会、2003）pp. 117-122.
- 8 後藤田純生「『みんなのうた』30年」『文芸春秋 69(8)』（文芸春秋社、1991）pp. 92-93.
- 9 後藤田純生「<みんなのうた>の歌づくり-広い視点から子どもの合唱を招く」『教育音楽 38(4)』（音楽之友社、1983）pp. 62-62.
- 10 後藤田純生「少年少女合唱運動の系譜（1）『みんなのうた』の放送とともに」『教育音楽 29(6)』（音楽之友社、1974）pp. 48-51.
- 11 例の中に《雪の降る町を》という戦後のヒット曲も含まれているが、後述する童謡・唱歌・民謡の基準には当てはまらないため今回の考察には含めない。《雪の降る町を》はNHKラジオで放送された連続放送劇「えり子とともに」の挿入歌として作曲されたものであり、NHK自身のカバーとも言える。「みんなのうた」には他にもこのような経緯の楽曲がいくつか存在しており、例えば1962年に放送された《夏の思い出》は、1949年にNHKのラジオ番組「ラジオ歌謡」にて石井好子の歌で放送されたもののカバーである。
- 12 「みんなのうた」公式ホームページにおける情報等を参考にしている。
- 13 堀内敬三、井上武士編『日本唱歌集』（岩波書店、1958）p. 240
- 14 山住正巳『子どもの歌を語る-唱歌と童謡-』（岩波新書、1994）p. 109
- 15 葉口英子「テレビ時代の'子どものうた'--NHK音楽番組『みんなのうた』にみるテキストの変遷と作り手の実践〔含 質疑応答〕（日本音楽学会第54回全国大会総覧）--（研究発表要旨）」『音楽学 49(3)』（日本音楽学会、2004）pp. 193-195.
- 16 例として、自由民主党編「『りぶる』創刊35周年 歌ぷらすα(アルファ)Special(第27回) 純烈 助け合い支え合う意識が大切な時代。誰もが楽しめる"みんなの歌"を歌っていききたい」『りぶる 36(6)』（自由民主党、2017）pp. 44-49. を挙げたい。
- 17 渡辺裕『歌う国民 唱歌、効果、うたごえ』（中公新書、2010）pp. 253-257
- 18 『童謡絵本 みんなのうた』の表紙。



19 『こどもクラブ』の表紙の例。



20 小学館（左）と講談社（右）による幼児絵本『みんなのうた』



21 園部三郎、山住正巳編『日本の子どもの歌-歴史と展望-』（岩波新書、1962）p. 142

22 出版物においても「童謡・唱歌 心のふるさと」のように、二つを併せた表記がなされることが多い。

23 『童謡絵本 みんなのうた』より《てんじんさまのほそみち（通りゃんせ）》



27 『こどもクラブ 10(8)』(大日本雄弁会講談社、1954-07)に掲載されている。画像は未入手である。

28 『小学館の幼児絵本 8(1)』(小学館、1967-04)より《ななつのこ》



主要な参考文献

- ・園部三郎、山住正巳編『日本の子どもの歌-歴史と展望-』(岩波新書、1962)
- ・金田一春彦『童謡・唱歌の世界』(主婦の友社、1978)
- ・山住正巳『子どもの歌を語る-唱歌と童謡-』(岩波新書、1994)
- ・鶴見俊輔『戦後日本の大衆文化史 1945-1980年』(岩波書店、2001)
- ・川崎龍彦『「みんなのうた」が生まれるとき』(ソフトバンク新書、2006)
- ・渡辺裕『歌う国民—唱歌、校歌、うたごえ』(中公新書、2010)
- ・周東美材『童謡の近代 メディアの変容と子ども文化』(岩波現代全書、2015)
- ・戸ノ下達也編著『<戦後>の音楽文化』(青弓社、2016)
- ・佐野靖、杉本和寛編著『文化としての日本のうた』(東洋館出版、2016)
- ・繁下和雄「現代の歌とことば--「みんなのうた」のことば」『短歌研究第38号』(短歌研究社、1981)
- ・葉口英子「“みんな”の『みんなのうた』—NHK 音楽番組の生産・消費をめぐる一考察」『マス・コミュニケーション研究 No.62』(日本マス・コミュニケーション学会、2003)
- ・津布楽杏里「『NHK みんなのうた』の功績：幼稚園、小学校の歌唱教材から見て」『研究紀要(4)』(貞静学園短期大学、2013)

[A Study on Beginning of Music TV Program “Minna-no-uta” of NHK: Focusing on Doyo and Shoka and Minyo]

[Sato, Keiji · 九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程・音楽文化学専攻
現在の研究テーマ：日本の児童音楽文化と国民形成との関連性]